さうし似氣無物の條に、したかみたわつきたる人の、あふひつけたるとあり、按にたわは撓の義なり、契冲法師の河社に、今も山里のものゝ、山のひくゝてたわみたるやうの所をいふ詞なりとあり、和訓栞にも、大和に鳥こへのたわといふ所ありといへり、さかればたぼ本名はたわにて、びんの撓みたるを名づけてよぶ名也、又つとゝいふは、かみのつどひ出たる名なるべし、びんごの尾の道邊にては、今も坂をたをゝいふと、ある人いへり、

〔歴世女裝考四〕椎茸たぼの權輿

序文に、明和乙酉の歳二年なりとありて、作者の名は三橋老人とあり、寫本全五卷、書名を寢覺草といふ隨筆三の卷に、ある老女の物語に、御奉公せし比、京都より下れし女中方の髪を葵たぼとて、名もおもしろく見つきもよきゆゑ、朋輩さゆうつしゆひけるが、今はいづかたにてもゆはるゝやうになりしは、名もめでたきゆゑなるべしと語りき、此老女貞享二年の生れなり、是を今の俚言に、椎茸たぼとは、髪の黑きを乾たる椎茸に準へつらんが、見立もあしく、名もいやしげなり、あふひたぼにてこそよけれとあり、又前にも引たる女用訓蒙圖彙に、御所風と傍註したる圖、右の說に符合す、

〔古事記上〕於是伊邪那岐命見畏而逃還之時、其妹伊邪那美命言令見辱吾、卽遣豫母都志許賣此六字以音令追、爾伊邪那岐命取黑御鬘投棄乃生蒲子、

〔古事記傳六〕黑御鬘、すべて加豆良に三の品あり、葛蔓同じもと鬘と髪となり、まづ葛は葛かづら五味忍冬など、凡て蔓草のことなり、鬘は頭の飾に懸る物なり、古書に纏とも縵とも鬘とも書り、纏は字書に見えず、縵は見えたれども鬘意なし、鬘は鬘のかきざまの異なるなり、髪は和名抄に、和名加都良、釋名云、髪少者所以被助其髪也と有て、俗に加毛自と云物なり、かくさまゝ〳〵あれども、本は一より轉れる名にて、草の葛より出たり、さて其葛の本の名は都良にて、記中に、登許呂豆良都豆良、書紀、万葉に、磨左棄逗囉、和名抄に、千歳藥

髪